

尋常
新體讀本

卷
四

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 7 9 3 5 a

福岡教育大学蔵書

T1A3

10

Ki44j

明治廿七年十一月一日
文部省檢定



尋常
小學
新體讀本

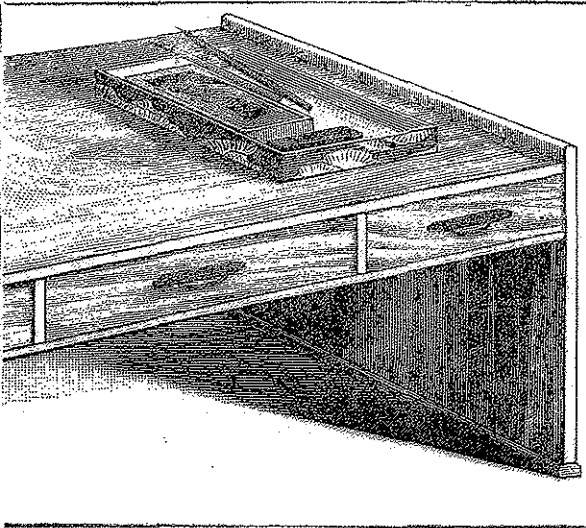
卷四

書畫

硯箱
墨筆
是

第一課 硯墨筆

コ、ニ机アリ、机ノ上ニ硯箱アリ、硯箱ニ
ハ、硯ト墨ト筆トアリ。
汝ハ是等ノコシラヘ方ト用ヒ方トヲ
知レリヤ。
机ハ、木ヲクミテ、コシラヘタルモノニテ、
本ヲヨミ、字又ハ畫ヲ書クニ用フルダイ
ナリ。



筆ハ、字又ハ畫ヲ書クニ用フルモノニテ、
其ノホハ、ケモノノケニテコシラヘ、其ノ
デクハ、竹ニテツクル。

硯ハ、石ヲホリテコシラヘ
タルモノニテ、墨ヲスル
ニ用フ。

墨ノ字ハ、黒キ土ト書ケ
ドモ、墨ハ、土ニテツクル

ニハアラス、アブラヤ、松ノ木ヲモヤシ
テス、ヲトリ、コレヲカタメテツクル
ナリ。

硯箱ノコシラヘ方ト用ヒ方トヲ、汝等
コ、ロミニ書キテ見ヨ。

文題 一、水入。 二、硯箱。

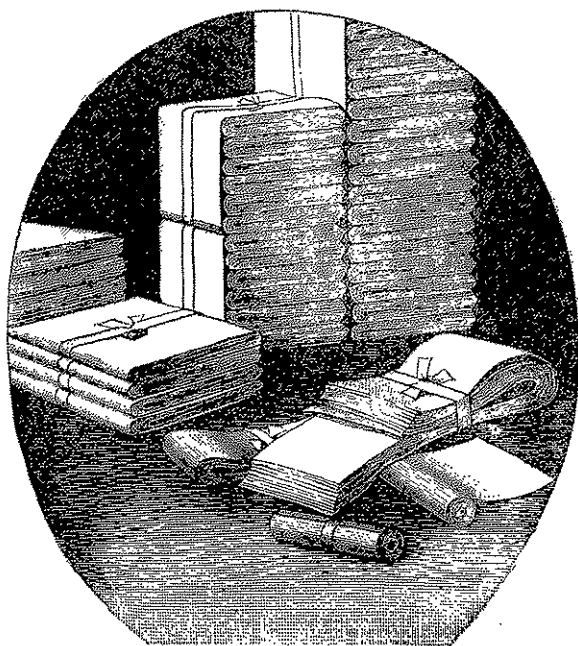
第二課 紙

コ、ニイロクノ紙アリ、長ケミジカクシ

半切

巻紙

帳面



テ、ハバヒロキハ半切
ナリ。 半切ハツナギ
オキテ手紙ヲ書ク
ニ用フ、コレヲ巻紙
トイフ。

高クツミカサ子タルハ半紙ナリ。
半紙ハ、サマぐノ書キモノヲスルニ
用ヒ、又、帳面書物ナドヲコシラフルニ

用フ。

半紙ノカタハラニアル大ガタノ紙ハ、
美濃紙ナリ。コレハモト美濃トイヘル

國ニテスキタルモノナリ。

半紙ニハ駿河^{スルガ}半紙トイフモアリ。

コレハ駿河トイヘル國ヨリ出ヅル紙
ナリ。

半紙ハ、二十枚ヲ一帖トイヒ、美濃紙ハ、

帖枚

四十八枚ヲ一帖トイフ。

文題一筆。二、墨。

第三課 池の魚

雨ふりて、河の水、庭にあふれしり。

池の魚ハ、皆庭ふ出でて、泳ぎまはれり。

見よ。色赤く尾長く、美しきもの

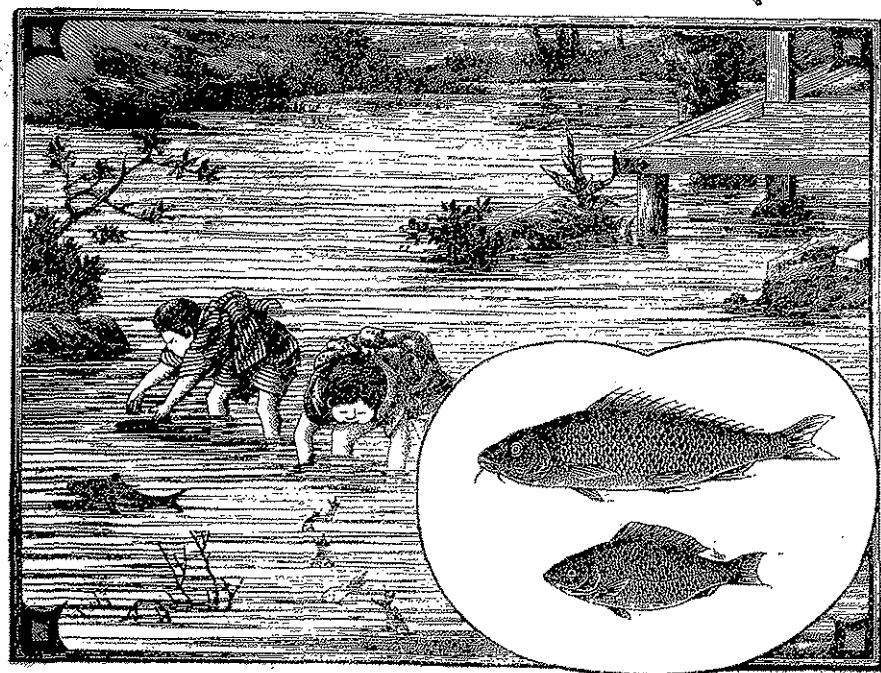
ハ金魚なり。

金魚ふ似て、大きなものハひごひなり。

庭 尾 金魚 似

明類

金魚とびこひとハ、
明のふ見ゆれども、
こひふの類ハ明か
に見えず。
こひハ色黒く一て、
はらふきいろなるつや
ある魚なり。ふな
ハこひに似て、平



太郎次郎

秋

魚なり。
太郎と次郎とは魚をとらんとして、庭に
出でしり。されど、あともなくざるも
なければ、とることハむつかかるべし。
秋ハ雨ふりつゞきて、池河のあふる、
ことあり。其のをり、あふみあふみに
出でしり、こひふなどをあふみ、こひと
おもしり。

されど水の出づること、極めて多きときハ家を流され時としてハ、川のちさううゝなふことあり、おそるべきことならずや。

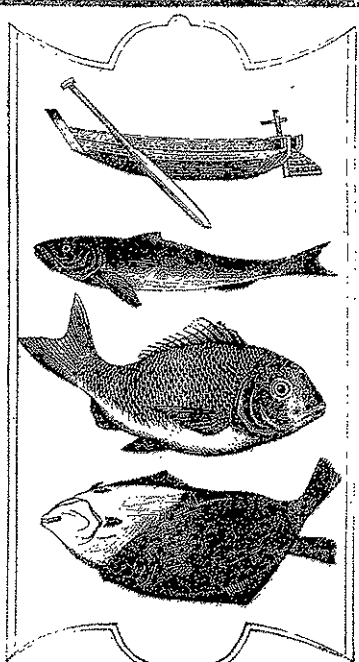
文題 一、巻紙。 二、帳面。

第四課 海の魚

船形

魚ハ水おすむものおて、其の形船に似たり。

定



人ハ、かいを動かして、船をやり、あちをまはして、向きを定む。

魚ハ、ひれをふるひて、水を泳ぎ、尾を動かして、向きを定む。

魚の、あらたの中に、いゝうきふくろとして、向きをくはふるふくろあり。 魚ハ、之をはり、之をちがめて、あいうにうきうづみ

之

をなすなり。魚ハ、河にすむものと、海ふすむものとあれど、海ふすむものわけて多し。海魚の中、人ふもてはやさるゝものハ、たひとひらめなり。

たひハ、ひれこはく、うろこうすあかくて、形うるはし。

ひらめハ、形平く、て、一めんハ黒く、

肉味共れ

一めんハ白し。

たひもひらめも、肉の味ハ、上品なれば、共ふ上等のれり、に用ひらる。

文題 一、ちんちん。二、さう。

第五課 やまあそび

あ、あ、あるあきのひハ、おまつとおあまのふたりも、つれづれにやまに遊び。やまふは、あまのへん、あまのへん、

なほうつくへはな—
のあらふい、あのこ
に「おれ」とさじ、うで
て「おれ」とめづらひの
あり。



ま
ふしうのをんあのおい、あちあちをあるは
て、うくへのうで、あををうめう、うまぐ
のまのおをうううめ、あどのうへに

を
まわりて、えがーをえづめう。

おま

おあちん、あちい、あのをあのを
あつて、あちい。

おあ

あちい、あちい、あちい、あちい。

あち

おあちん、あちい、あちい、あちい。

あつてあまき。

おま

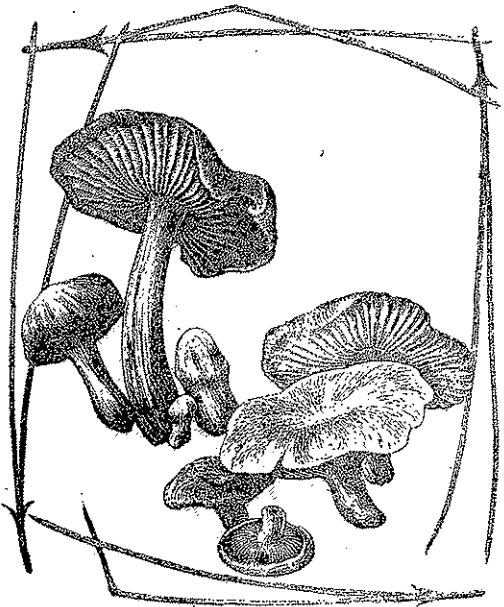
あれハ、おつとけとまつとけであります。

文題 一、おととけ 一、たひとひらめ。

第六課 キノコ

林

秋ハキノコノハエイヅル時ナレバ、林ニ
入リテ、キノコヲトルモノアリ、之ヲ
タケガリトイフ。



タケガリノコロハ、ジコウ
アタ、カニシテ春ノ
ゴトク、木々ノコズエ
色ヅキテイト美シ。
松ノ林ニハイロク

ノキノコアリ。

クキミシカクカサアツクシテ、ウラオモテ
共ニウスムラサキナルハ、ハツダケナリ。

香

好食炙煮

生世

香ヒ高ククキ太ク、色チヤイロニシテ、
少シ黒ミアルハ、マツダケナリ。
是等ノキノコハ、人ノ好ミテ食フモノ
ニテ、炙リテ食シ、又ハ煮テ食ス、味ヒ頗
ウマシ。

文題 一、ハギ。二、ス、キ。

第七課 衣食住

人ト生マレテ、此ノ世ニ生キナガラフル

衣服

寒命

ニハ、キルベキ衣服ナカルベカラズ、食フ
ベキ食物ナカルベカラズ、又住ムベキ家屋
ナカルベカラズ。

衣服ナケレバ、寒サ暑サヲフセグコト
アタハズ、食物ナケレバ、命ヲタモツコト
アタハズ、住居ナケレバ、雨ツユヲシノグ
コトアタハズ。

衣食住ノ三ツハ、人ノ此ノ世ニアル

カギリハシバラクモナクテカナハヌモノナリ。

サレバ人ハ幼キトキヨリ、是等ノダウリヲワキマヘ、常ニ之ヲ得ルコトヲツトムベシ。

文題 一タケリ。ニシヒタケ。

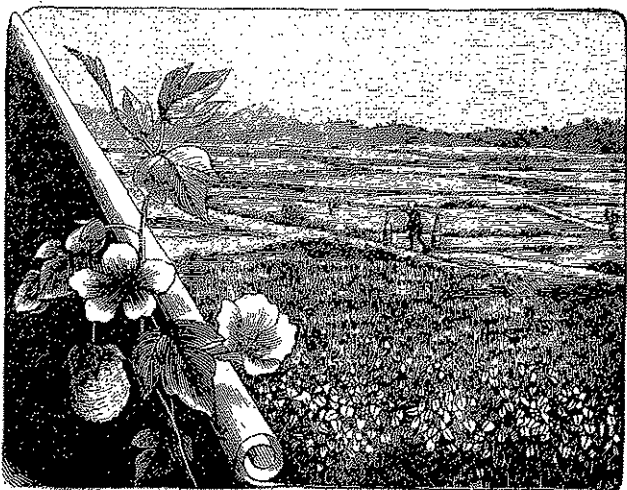
第八課 綿

此ノ畑ノ草ハユキノフリカ、リタル

綿

ヤウナリ。コレハ綿ノ木ノ實ノリテ、綿ヲハケルナリ。

至



綿ノ木ハ六七月ゴロ花サキ、秋ニ至リテ實ヲムスブ。

實ハ其ノ形モ、ニ似タリ、ジユクスレバサケテ綿ヲハク、其ノ色白クシ

テユキノゴトシ。

去

綿ハクリテタ子ヲ去リ、ウチノベテ綿ト

絲

爲シ、又ハツムギテ絲トモ爲ス。

ノベタル綿ハ、衣服ノアヒダニ入レ、ツムギ

織

タル絲ハ、織リテ織物ト爲ス、之ヲ木綿

織トイフ。

單物

着 衿

織物ハ、タチヌヒシテ、衣服ニ作ル。

衣服ニハ、單物衿綿入ナドアリ。

着

夏ハ、多ク單物ヲ着、春秋ハ、オモニ衿ヲ

着、フユハ、綿入ヲ着ルナリ。

仕立

綿ヲ作ルヨリ、衣服ヲ仕立ツルニ至ルマデ

ニハ、多クノ手カズノカルモノナレバ、

一枚ノ衣服モタヤスクハ得ガタシ、故ニ

衣服ハ大切ニシテ、ケガシヤブラヌヤウ

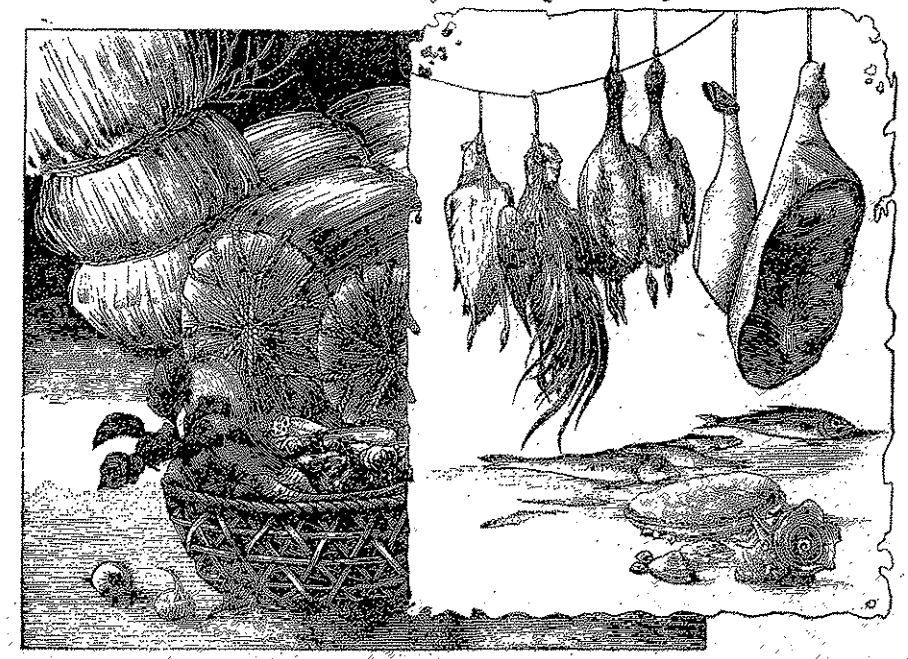
ニスベシ。

文題 一、食物。 二、衣服。

第九課 食物

保 穀物 野菜 米 麥

人の食物とあるもの
ハさまぐあれども
其の命を保つ爲ふ
なくてはならぬものは
穀物 肉類 野菜の三つ
あり。
穀物とハ米麥の類を



鳥 獸 貝

いひ、肉類とハ鳥獸魚貝の類をいひ、
野菜とハ、いも大根にんじんの類をいふ。
米は田ふ作り、麥ハ畑ふ作る。
魚貝ハ、海河よりとり、鳥ハ、多く家ふかふ。
獸ハ、まきどにあり、又家ふかふ。
野菜ハ、大方畑ふ作れども、中ふむ、田ふ
作るものあり。
穀物を作り、野菜をうる、鳥獸をかふハ、

百姓のわざあり。

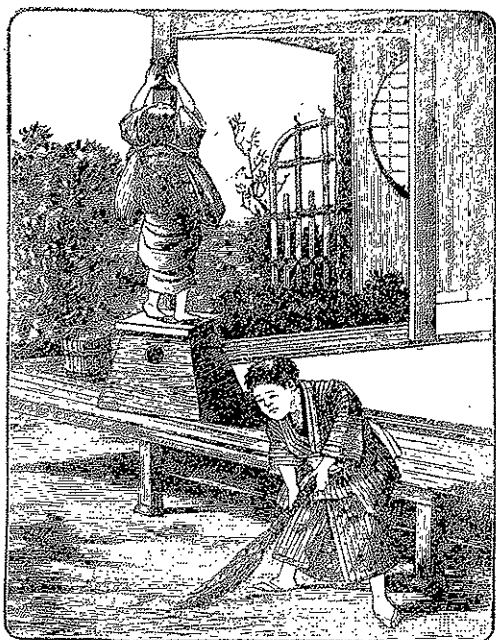
魚をとり、貝をひろふ、いれふりのわざなり。

是等のわざは、いづれもなくてゐるはぬものなれど、おろそかと思ふべからず。

文題 一、綿。 二、綿入。

第十課 住居

外 内 古 清 廣



太郎ハ家の外ふ出で、庭をはき、お秋ハ、家の内ふ居て、柱をふけり。

見よ、此の家ハ、古けれども、清らあり。

此の庭ハ、廣けれども、ちりなくあり。これハ、内外のさうぢ、よくめきとける

あようこ あり。

清らのある家に住こ、をきこる庭を
ながむるは、實ふ快けれども、きたあき家
ふ住むも、決して快きものにあらざ。
又、人と生まれて、きこあき家ふ住むハ、
人こるのひあきのみならず、やうあやう
ふもがいあり。

されば、汝等、ひまあるときハ、太郎の

如

如く、外ををき、お秋の如く、内をさうぢ
ゝて、よく父母のてだをけを爲すべし。

文題 一、穀物。 二、野菜。

第十一課 稻刈

天氣

稻

刈

今ハ十一月ナリ、天氣ウラ、カニシテ春ノ
如シ、稻ハヨク實ノリテ、田ノ中ニフシ
タリ。

見ヨ、カシコニハ、稻ヲ刈ル人アリ、コナタ

ニハ、稻ノホヲコキ
オトス人アリ。
コキタルホハスリウス
ニテ、モミヲワリ、トホシ
ニテ、モミヲ去リテ、米
トスルナリ。
取入
今ハ、取入ノモナカナレバ、百姓ハワケテ
イソガハシ。



末
粒
辛苦

夏ノ初メニ稻ノ苗ヲウエテヨリ、秋
ノ末、米ヲサムルニ至ルマデ、百姓ノ
ホ子ヲリハ、ヨウイナラヌコトナリ。
米ハ粒々皆、辛苦ヨリ生ジタルモノ
ナレバ、ユメくソマツニスベカラズ。
文題一、百姓。ニ、ドウシ。

第十二課 耕

ムシロノ上ニモリアゲタル白キモノハ、

米ナリ。

米ノ上ニ大小ニツノ枘アリ。大ナル

ハ一斗枘ニシテ小ナルハ一升枘ナリ。

一升枘ハ四方四寸九分アリテ、フカサ

二寸七分アリ。

コレハ取り入レタル米ヲ、俵ニヲサメ

ントスルトコロナラン。

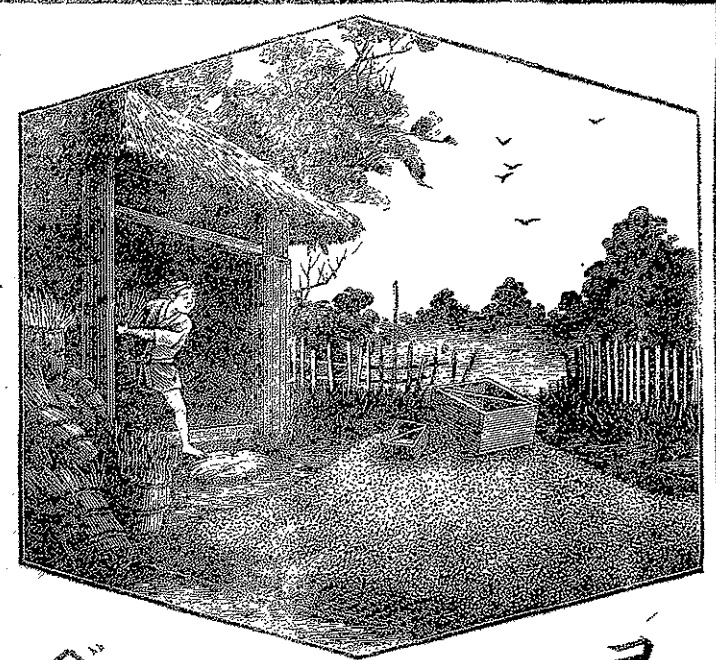
枘目ハ一升ノ十分一ヲ一合トイヒ、十升

枘 斗 升 俵

何程

凡

油 酒



ヲ一斗トイヒ、十斗ヲ一石トイフ。

ムシロノ米ハ何程アルベキカ。

凡、三石バカリモアルベシ。

枘ハ木ニテ、作りタルモノニテ、米麥ヲハカリ、又、酒油シヤウイウヲハカル

二用フ。

俵ハ、ワラヲアミテ、作りタルモノニテ、
米麥ナドヲ入ル、二用フ。

米俵ニハ、四斗入三斗五升入五斗入ナド
アレドモ、四斗入ヲ多シトス。

文題 一、米。 二、麥。

第十三課 一年

數年

一年ハ、三百六十五日にて、月の數を

十二あり、初めの月を一月と云ひをはり
の月を十二月といふ。

月ふハ大小のわちあり、日數三十一日
の月を大といひ、日數三十一日ふみざる月
を小といふ。

十二月の中、一三五七八十十二月の月
ハ大にて、二四六九十一の月ハ小
あり。

間冬時節四季

小の月ハ日數何れも三十日阿れども、
たゞ二月のこハ二十八日あり。
一年の間ふは春夏秋冬の四つの
時節あり、之を四季といふ。
汝等の知れるごとく、三月四月五月を
春といひ、六月七月八月を夏といひ、
九月十月十一月を秋といひ、十二月一月
二月を冬といふ。

來 歲 回

冬去れば、春來り、春去れば夏來り、夏
去れば秋來り、秋去れば冬又來る、年々
歳々四季回り回りで、このふことあり。

文題 一、掛。二、むろ。

第十四課 一月一日

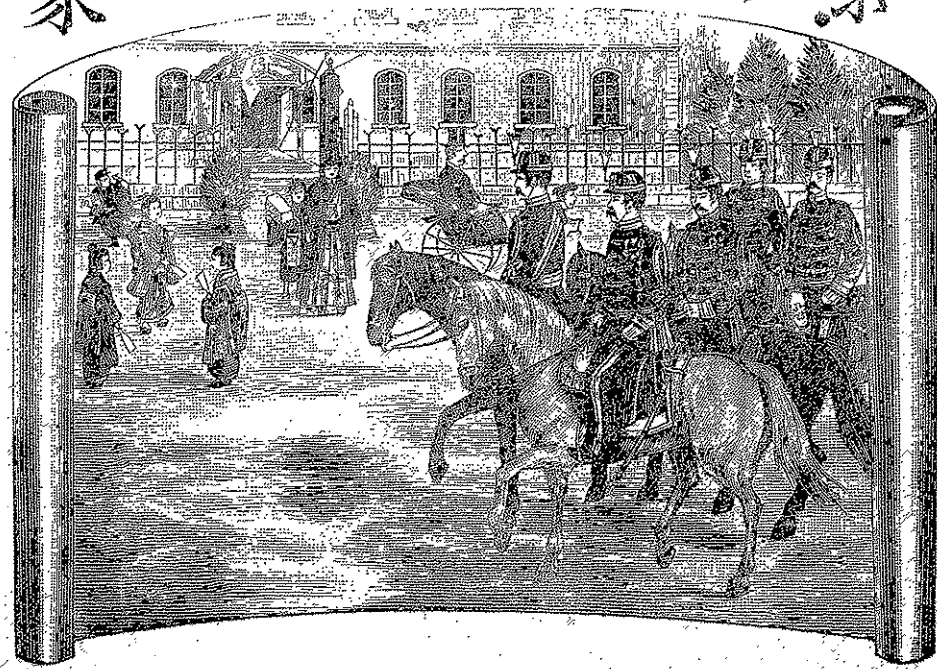
門 空 新玉 返

今日ハ、一月一日あり、門ふ立てたる松
かざり、空に阿げゑる、以のぼりハ、新玉
の年立ち返りたるをあらはせり。

御旗 軍人

日の御旗の、朝日ふ
かゞやき、軍人の、以の
めしき衣服つけくる
ハ、さながら日本國の、
以やさのにふさがに
んことをあめすが
ごとし。

此の日も、いつくの家



祝 親族 朋友

ふても、とそをのこさふにを祝ふ。
親族をとひ朋友をたづねて、新年の祝ひ
をのぶる人もあり、それの衣服を着て、
れひばねをつく女子もありて、家の内
も家の外もいとにぎやかあり。

空にかゞやく 日の御旗
門べふ つづく ちよの松
たこよえねよと うちむれて

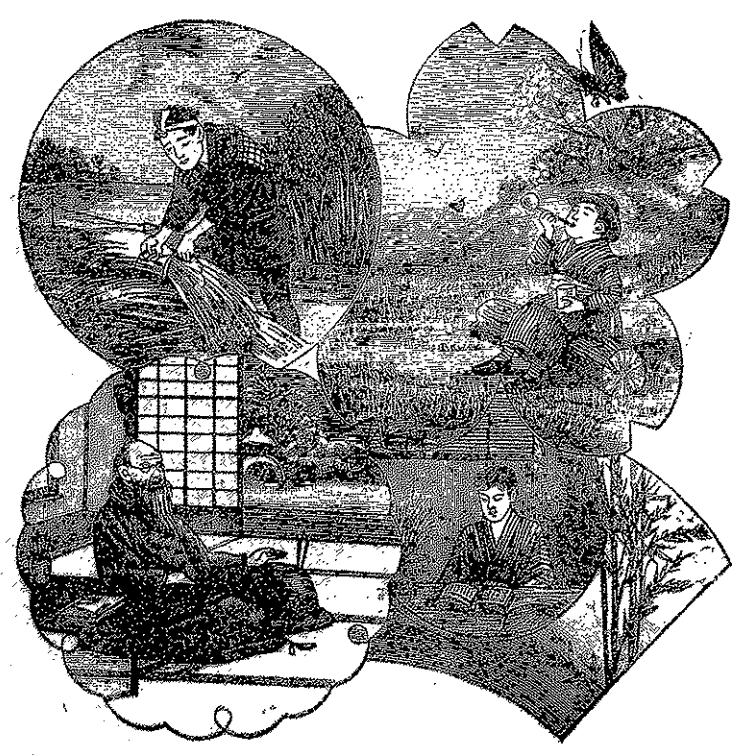
あざふ ござもの こゑぐに
たこく あられ ま あがれ
ひとざふ ニご こわさせむ
四方の けーきも あらたまる
年の はじめの にぎさーさ
文題 一月ノ大。 二、四季。

第十五課 人の一生

過年 年月ノ過ギユクハ、コマノ走ルヨリモ

速

早くヤヲイル
ヨリモ速ナル
モノニテ、マダ、
一月ト思フ中
ニ、ハヤ三月ト
ナリ、五月トナリ
テ、マダ、クヒマ
ニ、一年ノ月日



ハ過ギ去ルナリ。

人ノ一生モ年月ト共ニ過ギユクモノ
ニテ之ヲ四季ニタツレバ、幼キ時ハ
花サク春ノ如ク、少キ時ハ木ノハシゲレ
ル夏ノ如ク、壯ナル時ハ木ノ實ジユク
スル秋ノ如ク、スデニ老イタル時ハ、草木
カレシボム冬ノ如シ。

幾度

花サク春ハ、幾度トナク回リ來レドモ、

老 壯

再 學 業 暮 遊

幼キ時ハ、再 返リ 來ルコトナシ。

サレバ、今年ノ今日ハ、實ニ一生ニ一度
ノ今日ナリトカクゴシテ、學ヲヲサメ
業ヲナラフベシ。 今日ハ、暮レテモ
明日アリトテ、イタヅラニ遊ビ居ランニ
ハ、空シク一生ヲヲハルニ至ラン、フカク
イマシムベキコトナラズヤ。

文題 一、イカノボリ。 二、一月一日。

第十六課 雪

枯 降雪

今ハ寒中ナリ、草木ハ皆枯レハテハ、
野山ノケシキモ、イトサムシゲニ見ユ。
白ク清ラカナル雪、チラクト降り來



リテ、野
モ山モ、
見ワタス
カギリハ

障子 坐敷 兩人

一面ニ白タヘニナリタリ、木々ノコズエ
モ、時ナラヌ花ヲサカセタルヤウニテ、
イト美シ。

才秋ト才冬トノ兩人ハ、坐敷ノ障子
ヲ開キテ、降ル雪ヲナガメツハ、イロク
トカタリアヒシガ、才秋ハ、才冬ニムカヒ
テ、次ギノハナシヲ爲シタリ。

才秋

アルイヘニ、カシコイ コドモガアリマシ
タ、フユノヒ、コガウトイヘルヲシナ
トトモニ、フルユキヲミテヱマシタ
ガヤガテ、

ふるもきが おもしろいからむとてあけて、

こがうのあはふぬりゝとぞある。

トイフウタヲヨシダソウデアリマス。
ナント、オモシロイカンガヘデハアリマセ

ヌカ。

オ冬

ホシタウニオモシロウゴザイマス、ワタクシ
モマ子ヲシテミタウゴザイマス。

文題 一、冬。 二、少年。

第十七課

ゆきだるま

おや、たいそう ゆきのふりまーるゝと
かーも まつーろて ありまふ。

れ

れ



れもやまも、あはのあろ
ぎゅうをふつまつんやう
てありませう。

たらう、いさんおんのを
ごちをつれてにえお
おりまーい。

たらう

あら、これらうもぎるまをまーらて

あそびませう。

まこち、もきをかいてくれ、まへへ
いだるまをまーらませう。

おほきおだるまのてきまーい。

あらぬさん、いごんをもつてきてめ
れたまをつけたまへ。

あらぬさん、いごんをもつてきて
ひげをつけたまへ。

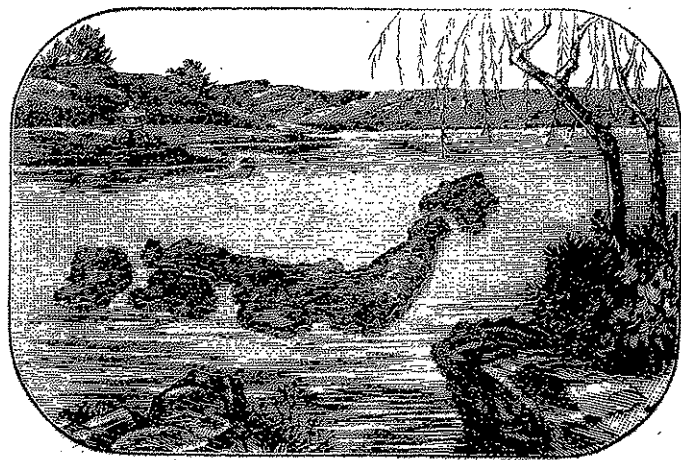
それできあがりまゐた、ふんと、よゝう
かられ、ゆきだるまではありませぬか。
これと、いふも、みゑがほねをつて、
はたらい、このうで、ありませう。

文題 一、ゆき。二、こほり。

第十八課 日本國

嶋
見よ、池の中ふ、四つ、此嶋ありて、弓なり
につらふれり。これ、我が日本國、此

千里 雛形 氣候



形になぞらへて、作りたるものあり。
此の作りたる嶋ハ、小さく、一て、長さ一丈
にみたざれども、まゑと、此
日本國ハ、極めて大きく、
て、長さ千里にわかれり。
此の雛形ふて、見る如く、
日本國も、海の中ふ、ある
嶋國に、一て、氣候よろしく、

土地物產

土地乙にて物産多し。

農業

農業ハ、むづより盛んにて、米麥極めて
 多かり。海小む、以て、此

富

魚類あり、山にも、さまざま、此材木あり、
又、商業も繁昌し、工業も盛んある故に
それくのわざをつとむれば、衣食住此
三つとも、心のまゝに得らるべし。

文題 一、農業。 二、商業。

第十九課

紀元節

日の丸の旗ハ門のまへにひるがへり、
ほづきぢやうちんハ、けきけあうりに
つらなれり。

紀元

遠

けふハ、以のなる祝日あるか、けふハ、二月
十一日にて紀元節あり。
紀元節とて、遠きむの、シムテンワウ神武天皇が、國內此
惡きものどもをうち平げて、えどめて

紀元節と云、遠きむのし、

シンムテンワウ

神武天皇が國內に

惡いきものどもをうち平げて、もどめて

御位

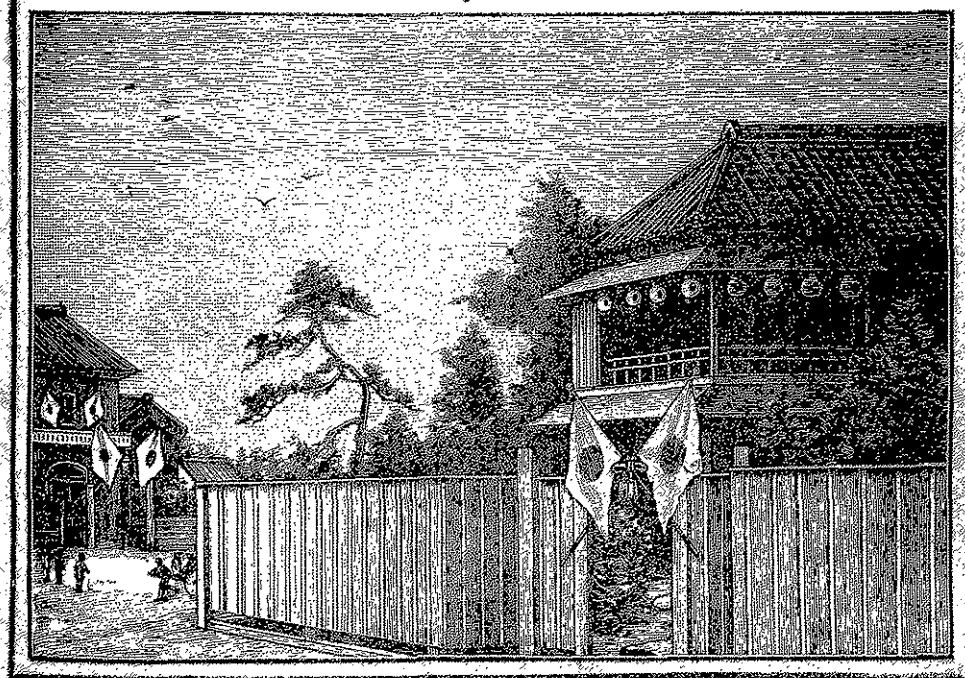
天子れ御位ふつせ
たまひるを祝ふ日
あり。

一代

先祖

神武天皇は、我の國
第一代れ天子ふて、
今の天子れ御先祖
あり。

されバ日本中れ人々



於

萬代

え

は此の日ふ於て、神武天皇をむづめ
たてまつり、世々れ天皇のあつき御めぐと
を思ひ出で、又今れ御代の千代萬代
までえさのえんことをのりいはふあり。

空にかぐやく 日はえとの
萬れ國に たぐひあき
國のみえしら えてー世を
あふぐけふさそ たのーけれ

文題 一嶋。 二日本國。

第二十課 日本武尊

第十二代景行天皇ノ皇子ニヤマトヲグナ
トイヘルヲ、シキ皇子オハシタリ。

大將 或ル時、西國ナル熊襲ノ大將熊襲梟帥

トイフモノ、軍ヲオコシ國ヲミダシケレ

バ天皇皇子ニ命ジテ、之ヲウタシメ

僅 タマフ。 皇子御年僅二十六ナリシガ

仰承直



仰セヲ承リテ、直ニ
其ノ國ニ下リ、少キ
女子ノスガタシテ、
タゞ一人梟帥ノ家
ニ入リコミタマヘリ。

劔

此ノ時梟帥ハ酒モリシテタハブレ
キタリ。 皇子ハヲリコソヨケレト、劔
ヲカクシモチテ、ヒソカニスキヲウカビ

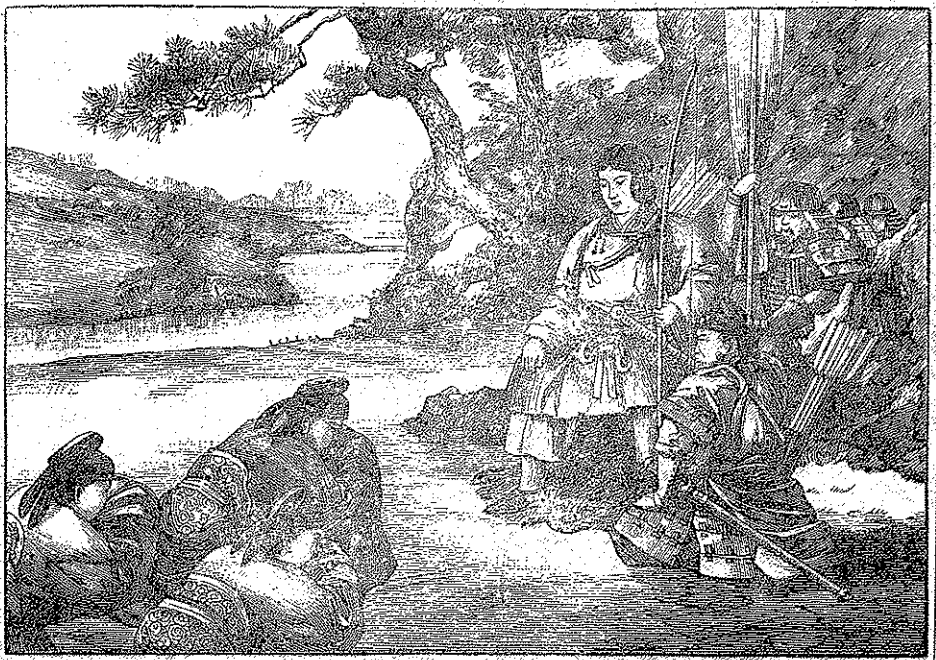
梟帥オドロキテ君ハタツトトフ。皇子
シヅカニ「ワレハ今上天皇ノ皇子ヤマト
ヲグナナリ。トコタヘタマヘバ、梟帥、西
ノ國ニハ、ワレホドノタケキモノアル
ベシトモ、思ハザリシニ、ヤマトニハ、

カ、ル タケキ人モ、オハスルニヤ、コレヨリ
ヤマトタケルノミコト
 後ハ、日本武尊ト名ノラセタマヘ。トイヒ
 テ、イキタエタリ。

文題
一、工業。
二、紀元節。

第二十一課 神功皇后

後
先ニ日本武尊ノ熊襲ヲ平ゲタマヒテ
ヨリ後、百年バカリヲヘテ、熊襲又、軍ヲ
オコシタリ。



時ノ天子、仲哀天皇、
親ラ出デムカヒテ、之
ヲウチホロボサント
シタマヒケルガ、軍
半バニシテカクレサセ
タマヘリ。
天皇ノ御后、神功皇后
ハ、カ子テヨリ天皇

從

甲冑

降參 恐王

ニ從ヒテ、軍中ニオハシケルガ、心ニオボス
ヤウ、熊襲ヲセイバツセンヨリハ、先、新羅
ヲセイバツシテ、其ノ根ヲタツニシカジ、
イデヤ新羅ヲセイバツスベシ。トテ、
男ノスガタシテ、御身ニ甲冑ヲツケ、
武内宿禰ナドヲメシツレ、海ヲワタリテ、
新羅ノ國ニオシヨセタマヘリ。
新羅ノ王、大イニ恐レテ、降參シケレバ、

新羅ノ王、大イニ恐レテ、降參シケレバ、

隣

隣國ノ高麗^{コマ}百濟^{クダラ}トイフ國々モツ、イテ
降参^{カン}シタリ。世ニ此ノ軍ヲ三韓^{カン}
セイバツトイフ。三韓トハ今ノ朝鮮^{テウセン}
ノ地ナリ。

文題一、日本ノ物産。二、日本武尊。

第二十二課 手紙

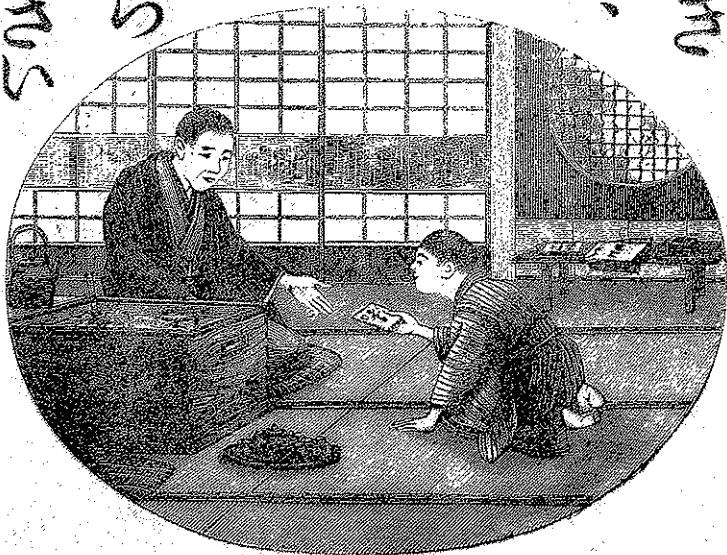
上田孝一といへるもの、机ふむかひて
手習を爲し居るに、太田一郎といへる

讀

朋友より此手紙とゞき
たり。之を讀むふ、
次ぎの如くあるめて
あり。

示

明日を休日であり
ま是から朝の九時あら
御あそびふ遊ばしてください
孝一ハ、之を父に示して、いふと



たづねたるに父は、讀本のふくあふを
すませて後、あそびふ出づるハ苦一のら
むといふ。

返事

孝一もつゝゝゝて、其のむねを承り、次ぎ
の如く返事をきたしめて、一郎れをこへ
おくりたり。

済まねき下されありおたくぞんどまを
明朝九時ふも参りかねますが十時

行 受

道

にはきつとあがります

すべて外へ出づるときハ必、其れ行く
さまを父母につげ、其のゆるゝを受けて、
後に出づべし。ことわりもあく、こたひ
ふ外に出づるも、親ふ事ふるれ道に
あらむ。

文題

一、甲冑。

二、軍人。

第二十三課

郵便

認送 使 郵便 差出 集

時間 状袋

用事を認めて、人へ送る紙を手紙といふ。
 手紙を、使ふ持たせて、送り届くるものと
 あれど、大てい郵便へて差し出さる。又、
 郵便ハ、時を定めて、取り集めを爲し、又、
 送り届けを爲すものあり。故に手紙
 を、郵便はこの中へ入れおけ、バ、定め
 の時間に、ハ、受取人此方へ届くあり。
 長さ用事ハ、巻紙へ認めて、状袋此中へ



郵便がきに認めて、差し出さる。

入れ、郵便切手をはり
 て差し出さる。又、
 郵便切手ハ、此方へ
 此品あり。
 用事みどかくして、
 人へ見らるゝも、
 は、かりあきものハ、

汝等も、来る四月よりハ手紙を認むる
けいおを、さるはずなれば、是等の事
ハ、今よりよくおぼえなくべし。

文題 一、手紙。 二、人をまねくことばを書け。

明治廿七年八月十二日印
同 年八月十五日發行
同 年九月廿五日訂正再版印刷
同 年九月廿八日發行

定價金八錢

算術言ノミ

金港堂書籍株式會社編輯所編輯

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

發行者 印刷者 金港堂書籍株式會社

代表者 右社長 原 亮三郎



大阪市東區南本町四丁目 金港堂

賣捌所 官城縣仙臺市國分町五丁目 金港堂

